

14日 土曜

ダニエル

1:1 ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカデネザルがエルサレムに来て、これを包囲した。

1:2 主がユダの王エホヤキムと神の宮の器具の一部とを彼の手に渡されたので、彼はそれをシヌアルの地にある彼の神の宮に持ち帰り、その器具を彼の神の宝物倉に納めた。

1:3 王は宦官の長アシュペナズに命じて、イスラエル人の中から、王族か貴族を数人選んで連れて来させた。

1:4 その少年たちは、身に何の欠陥もなく、容姿は美しく、あらゆる知恵に秀で、知識に富み、思慮深く、王の宮廷に仕えるにふさわしい者であり、また、カルデヤ人の文学とことばとを教えるにふさわしい者であった。

1:5 王は、王の食べるごちそうと王の飲むぶどう酒から、毎日の分を彼らに割り当て、三年間、彼らを養育することにし、その後で彼らが王に仕えるようにした。

1:6 彼らのうちには、ユダ部族のダニエル、ハナスヤ、ミシャエル、アザルヤがいた。

1:7 宦官の長は彼らにほかの名をつけ、ダニエルにはベルテシヤツアル、ハナスヤにはシャデラク、ミシャエルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴと名をつけた。

1:8 ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。

1:9 神は宦官の長に、ダニエルを愛しいつくしむ心を与えられた。

ダニエル書は預言の書として扱われますが、もともと旧約時代においては、聖文書（または諸書）の



Bible Reference
聖書の記述

カテゴリーに入っていました。すなわち詩篇と同じく、現在を神とともに生きる民への教えです。捕囚となって異教の地に住むというのは、不信仰者の中に住むクリスチヤンのようであり、ダニエルの行き方は私たちの模範とするところなのです。またダニエルに主がよくしてくださったことは、私たちの希望もあります。

その希望はダニエルたちの信仰の従いにあります。旧約の律法ではありますが、当時の神様の命令を守り、「身を汚すまいと心に定め」ていたのです。それゆえに「神は宦官の長に、ダニエルをいつくしむ心と与え」られたのでした。

この世に生きるために一番必要なのは、器用に立ち振る舞うことではなく、主に従う愚直さであることを学びましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

